

ビデオ 通信

2020年
6月15日(月)
No.4383

月・木曜日発行
1ヶ月¥11,000(税別)
発行：飯澤剛 編集：齋藤浩一

ユニ通信社

〒106-0047
東京都港区南麻布5-2-37
DEPECHE MODE 4F
TEL：03-5422-7515
FAX：03-5422-7516
E-mail：vt@uni-press.net

パナソニック映像

テレビドラマ『スナイパー時村正義の働き方改革』に技術協力
ミラーレス一眼カメラ「S1H」による撮影から本編集&グレーディング、MAまで
働き方改革や“with コロナ”時代の幅広い映像制作の要望に応える

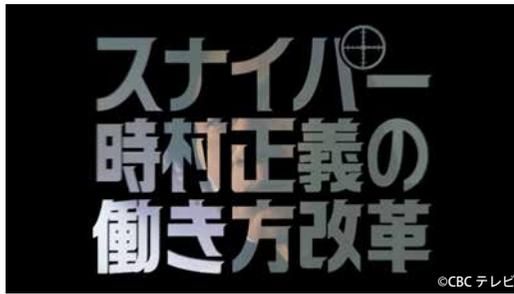


パナソニック映像(株)は、テレビドラマ『スナイパー時村正義の働き方改革』(株)CBCテレビ/株共同テレビジョン)を担当した。同ドラマは、“真の働き方改革”とは何かを問いかける、凄腕スナイパーと若手人事部の物語で、3月12・19・26日(深夜0:59～1:29の30分)の3日間に全3話を、CBCテレビの放送エ

リアである東海地区(愛知、岐阜、三重)で放送。また、再放送として5月2日(14:00～)に全3話が一挙放送された。さらに、現在はひかりTVチャンネル+、ひかりTVで2022年4月14日まで配信されている。同社では企業VPからミュージックビデオ、情報番組、テレビCM、展示映像、VR作品、オリンピック映像に至る様々な映像制作を手がけているが、“テレビドラマ”というジャンルにおいて撮影から編集、仕上げを一貫して担当したのは今回が初めて。撮影にパナソニック(株)のフルサイズミラーレス一眼カメラ「LUMIX DC-S1H」を採用したのが大きな特徴で、35mmフルサイズセンサーや422 10bit V-Log収録などによる放送用カメラと遜色ない画質のクオリティは、放送局の技術陣からも高い評価を得た。さらに、DaVinci Resolveのプロジェクトデータを用いたカラーグレーディングなどによってそのクオリティが保持されたままで上げることができたという。同社では〈働き方改革や“with コロナ”の時代においても、小規模な作品から4K/8Kなどハイエンドコンテンツまで幅広い映像制作の要望に応じていく〉としている。

放送用カメラと遜色ない画質のクオリティ

もし、人知れず世界の平和を守ってきた伝説のスナイパーが作戦中に突然、「17時に退社しろ」と言われたら……? 『スナイパー時村正義の働き方改革』は、狙撃のための残業はダメ! 休日出勤もダメ! 昼休憩は絶対! 誰も見たことのない、これからも見ることのないであろう“働き方改革ハードボイルドコメディ”で、「働き方改革元年度」において“真の働き方改革とは何か”を問いかける。



『スナイパー時村正義の働き方改革』制作スタッフ

企画・プロデュース：尾関美有（CBC テレビ）／プロデューサー：柳川由起子（共同テレビジョン）／監督：吉村慶介（共同テレビジョン）／撮影：貝谷慎一（パナソニック映像）／Bカメラ：和田 晋、坂口政也（パナソニック映像）／DIT：志田茂人（パナソニック映像）／照明：田部谷正俊（光影舎）／音声：武廣吉則（バンエイト）／本編集・カラリスト：石黒一哉（パナソニック映像）／本編集助手：中垣宏規（パナソニック映像）／MA：野田稔晃（パナソニック映像）／スタジオ担当：入倉謙二（パナソニック映像）／撮影マネージャー：三善春香（パナソニック映像）

出演は高杉 亘（情報機関・JIA のスナイパー）と高田夏帆（JIA の人事部）の 2 人だけ。

同ドラマの制作では、地上テレビ局の連続ドラマの撮影に、パナソニックが 2019 年に発売したフルサイズミラーレスデジタル一眼カメラ「LUMIX DC-S1H」（写真→）を選択したことが大きなポイントとなっている。

撮影を担当した貝谷慎一氏（パナソニック映像 テクニカルグループ 撮影チーム シネマトグラファー）は「当社では LUMIX GH5 などスチルカメラの動画機能を使っての撮影もしていますが、発売時から是非「S1H」を使ってみたいと思っていました。



特にあの小さなミラーレスカメラに、蛍光灯下での撮影、テレビやパソコンモニター画面を撮影する場合などに発生する画面のフリッカーを低減する「シンクロスキャン」や、複数台のカメラを同期させる「タイムコード入出力機能」など数多くの動画撮影の機能を満載しているのが大きな特徴。また、2420 万画素 35mm フルサイズセンサーも搭載し、被写界深度など映像の美しさを表現できる。VARICAM と同じ 14 + STOP のダイナミックレンジや V-Log/V-Gammat、422 10bit 収録など、まさにプロの放送機材として遜色ないカメラだと感じました。センサーが大きいのでノイズが少なく、従来の 2/3 インチカメラよりベース感度が高感度なため、ライティングをより効果的に使うことができます。美しい映像にライティングは必須ですが、少ない機材でも美しく撮れる。編集段階で映像の切り出しやブローアップをしても 422 10bit 収録なので、画質にザラつきがありません。さらにはアクションシーンではハイスピード撮影もできます」と語る。また、DIT を手がけた志田茂人氏（テクニカルグループ 撮影チーム）は「撮影現場は倉庫などの暗い場所が多か

ったのですが、422 10bit/V-Log によって撮影することで暗部を後から引き上げることもできます。そうした部分で高いクオリティが保てたのではないかと思います」とする。

撮影現場でも“働き方改革”

今回のドラマにおけるキーワードは“働き方改革”。貝谷氏は「プロデューサーの意向として「働き方改革をテーマにしたドラマなので撮影時間も短くする。2日撮影したら1日休み。午前9時に開始して、19時には終了」だと……。DITのデータコピーについても、午前中の収録分は昼休み、午後の方は夕方休憩の時にデータコピーを行い、撮影後の作業をなるべく減らすよう工夫しました。それも“働き方改革”の一環ではないかと考えています」と振り返る。

撮影は今年2月後半に6日間のスケジュールで行われた。S1Hに搭載されたタイムコード機能を用いてカメラ2台体制で撮影。本体内のSDカード(128GB)にHDで収録した。現場では撮影部がDITを含めて3人、照明部は2人、録音部は1人というかなりの少数体制。〈大きなカメラだとスピード感が失われたりしますが「S1Hだったから3人でできた」という部分があると思います」と志田氏。

また、RONIN-S(DJI)などの片手ジンバルを使用する際、通常のカメラならもう1台必要となるが、S1Hをそのままジンバルに載せ換えることで撮影可能という小型・軽量さも大きなメリットだったという。

DaVinci Resolve プロジェクトを用いてカラーグレーディング

編集における大きな特徴は、オンライン編集(本編集)とカラーグレーディングを編集室(Studio-2)で同時に行ったこと。

オフライン編集は演出の吉村慶介氏(共同テレビ)が担当。V-Log撮影のため、貝谷氏が作成したLUTを当てたデータを渡し、オフライン編集を行った。

オフライン編集したAdobe Premiereのデータから、まずはBlackmagic DesignのDaVinci Resolveでカラーグレーディングを行った。撮影現場で作成したLUTデータではなく、DaVinci Resolveのプロジェクトデータを用いてグレーディングを行ったという。

本編集&カラーグレーディングを担当した石黒一哉氏(テクニカルグループ スタジオ技術チーム)は、〈セカンダリーで暗部だけ色を調整するなど作り込みに必要な情報はLUTには載らないため、DaVinci Resolveのプロジェクトをそのままいただいた方が確実です」とする。

グレーディングしたデータを一度書き出すカタチで本編集を行うPremiereに戻し、テロップなどを入れて完パケ。その映像データをMAに回し、最終確認を経て、納品形態であるXDCAMおよびHDCAMに書き込んだ。MAを担当した野田稔晃氏(テクニカルグループ スタジオ技術チーム)は〈ドラマのような長尺モノは音効さんと合わせる作業が必要なのでAvid Pro Toolsによる作業がメインになります」と説明する。



撮影風景

(次ページに続く)



貝谷慎一氏



志田茂人氏



石黒一哉氏



野田稔晃氏



入倉謙二氏

三善春香氏（デスク
マネージャー）

“New Normal” 時代における幅広い映像制作のニーズに対応

貝谷氏は「今回の映像は、放送局の技術陣から「このドラマはどんなカメラで撮影したのか？」と問い合わせが来るほどのクオリティの高さでした。S1Hは、番組予算が決して潤沢ではない地方局などのドラマ制作において、「予算上使えないハイエンドカメラやレンズのクオリティにいかにも近づけていくか」を追求していくための選択肢の1つになるカメラだと考えています」とする。

また、入倉謙二氏（テクニカルグループ AGM）は「これまで企業VPや展示映像、テレビ番組、CMなど様々なジャンルの映像制作をトータルで手がけていますが、今回は“テレビドラマ”というジャンルで撮影から仕上げまで一貫して担当できたことが当社としての新しい取り組みでした。新しいカメラをフルに活用して放送局の技術陣からその画質が高く評価されたり、予算の少ない作品におけるコスト感にもマッチさせることができた。当社では4K/8Kといったハイエンド映像制作にも対応しており、幅広い要望にお応えできることが大きな特徴です。今回のテーマとなった“働き方改革”については、同社でも「撮影マネージャー」を置き、時間管理等を厳しく徹底しています。クリエイターはとことん突き詰めて時間を使ってしまうますが、年間で働ける時間は決まっており、そこをうまく割り振る人が必要だと考えています。また、“with コロナ”“after コロナ”の時代には、現場の人数が限られるケースも多くなることも予想されます。今回のドラマで「それは無理」ではなく「それでもできる」という体制を構築できたことは、当社にとって今後、何らかのプラスにできるのではないかと考えています」と話している。